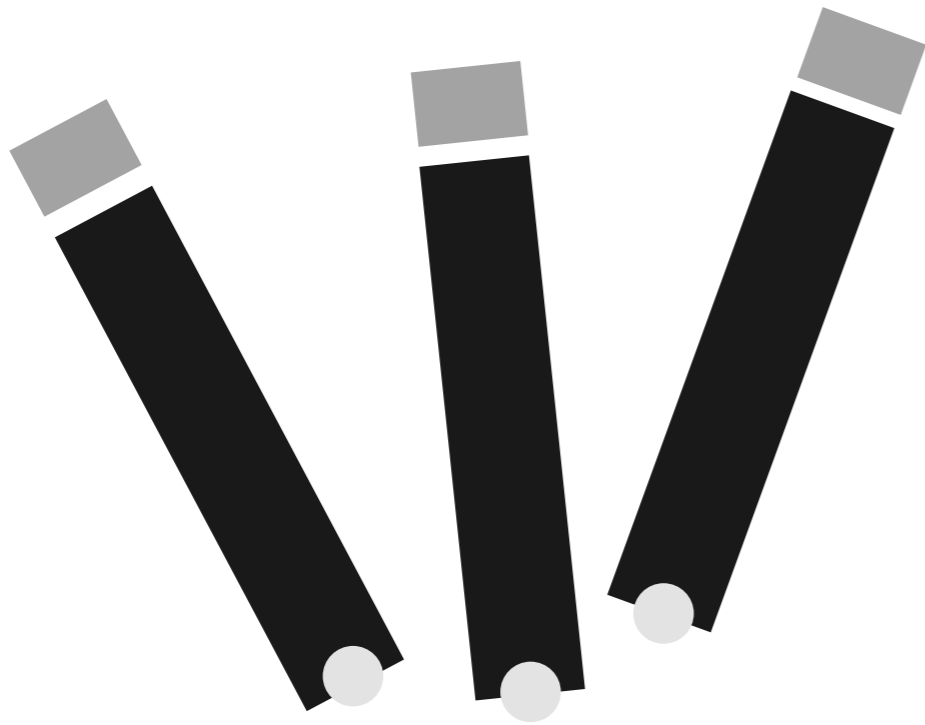

月 刊

MAROAD

Vol.178



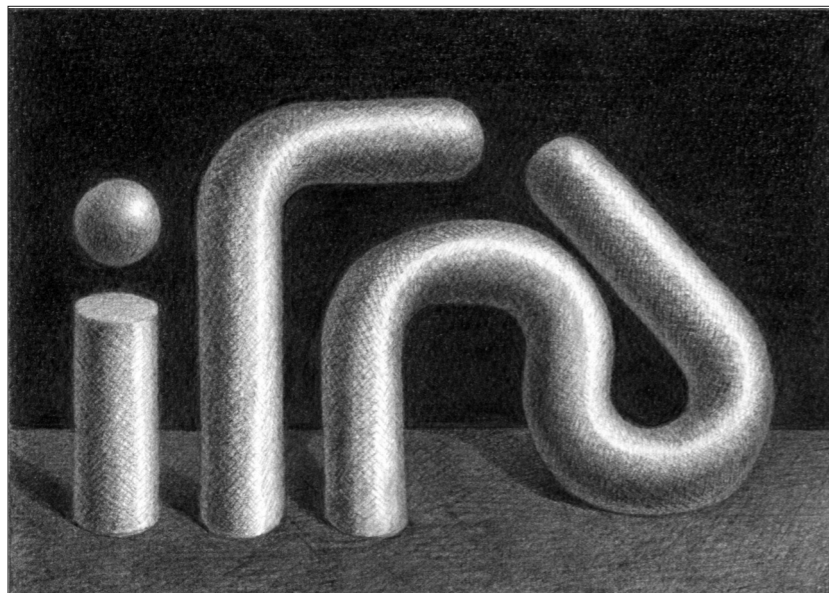
2022.11.27

詩と評論

月刊「Maroad」

Vol.178.2022.11.27

「月刊Maroad」編集部



10 珈琲タイムレッスン (大人の絵画教室)

- レッスン2-4について
 ・下図は完成しましたか？ それでは次へいきましょう。
 ○レッスン 2-5 球と円筒形
- 1 「レッスン2-4」で描いた下絵に陰をつける
 ・光の方向を設定して陰影を想像してみよう。
 ・柔らかい自然光を想像しよう。(右斜め上手前よりの自然光)
 - 2 立体に見えるように陰を描く(目標)
 ・円筒と球のハイライトとの位置を合わせる。
 ・球のハイライトの位置を回転させずに球を円筒形のカーブに合わせて移動させ、ハイライトの位置を確認します。目で追いつながら想像してください。
 - 3 注意点(ヒント)
 ・円筒形の陰の左端が少し明るくなっています。これは反射光を想定したものです。
 ・背景をつけています。円筒形をのせている台と暗い背景です。
 ・台の上の円筒形の影と設定した光の方向の関係をそろえる。
 ・光の条件の合うところに、実際に物を置いて観察してみよう。

はらだてつろう (美術家)

「月刊まるうど」178号 目次

詩・俳句

- 鴉啼く 詠 (俳句) ……岩脇リーベル豊美 4
 ペガサス (俳句) ……乾佐伎 4
 カンガルー／カレー ……いなだ豆乃助 6
 痛み ……原田ひでよ 7
 隔離される明日 (第25回ロルカ詩祭朗読作品) ……大橋愛由等 10
 はてしなき観察ののち ……野口裕 12
 影 ……富岡和秀 13
 芋を食べている ……中嶋康雄 14
 気化せぬ触手 ……大橋愛由等 15
 定型ソネット ……大西隆志 21
 評価図式 ……原田哲郎 23

翻訳詩

- 詩の森から—仏蘭西詩の世界〈15〉 ……にしもとめぐみ〈訳〉 5

ART NOTE

- 珈琲タイムレッスン (大人の絵画教室) ⑩ ……はらだてつろう 93

新企画 LIBURO 書評

- ベケット『ゴドーを待ちながら』 ……富岡和秀 8
 攝津幸彦句集拾遺二〇二二、十一 ……野口裕 9

連載小説

- 『マルクスの場合』—旅立ち②マルクスの日常 ……諸井学 16
 21 回目／「海猫堂店仕舞記」 ……千田草介 17
 「風景の隙間③」 ……リチャード・パーカー 18

連載 評論・エッセイ

- レガートな日々〈6〉「ピアノという楽器」 ……原田ひでよ 22
 神戸詞あしび〈165〉「夫婦で心中する近松劇—太夫の熱唱が絶品だった」 ……大橋愛由等 24

編集部だより★100/隔月開催ではあるが、あらたに詩の会が今年(2022年)秋から立ち上がった。主宰するのは詩人の大西隆志氏。名称は「姫路文学教室準備室」。設立にあたって大西氏はこのように宣言している。「文学の響きが時代錯誤的になっている今の時代に、ささやかで小さな試みを始めます。かつて神戸には「市民の学校」があり、今も大阪には全国的な規模の「大阪文学学校」が存続しています。個人的に二つの文学を基調にした学校に縁をもたせてもらいました。五十年前のそんな経験がいまだに創作の面白さのワクワク感を保っているのです。まずスタートを切ります。二カ月に一回程の開講ですが、ゆっくりと小規模でやります。講義と創作合評の二部に分かれています。講義のほうは文学、文学につながる哲学思想、社会科学などの文化を中心にして、幅広いジャンルを取り扱います。創作合評は、自作の詩歌(詩、俳句、短歌、川柳)、小説、エッセイなどを相互に語り合います。われわれの文学学校は、姫路というトポスに立脚しつつも、同時に地域性を越えた創造力あふれる文学や表現を発信するメディアであることを目指したいと思います。この会も二部制となっていて、第一部は「講義」(われわれの会で言えば「読書会」、第二部は「創作合評」(同・合評会)となる。第一回目(2022.7.25)の「講義」はわたしが担当。評論家・運動家の津村喬について語った。二回目の話者は俳人・夏石番矢氏(9.26)。そして三回目の話者は川柳作家・大西泰世氏(11.21)が担当した。会場は大西氏が店主を務める古書肆「Quiet Holiday」の2階。狭い急な階段を登って屋根裏部屋のスペース。15人ほど入ると満席となる広さだが、文学の会を催すのには、大きくもなく小さくもない。名前が「文学学校」という明晰なネーミングであることと、「姫路」という明確な土地名が明示されていることが奏功している。こんごも活動を続けることで、多くの参加者があることを期待している。わたしも第二部「創作合評」の司会をまかされることも多く、会の運営にもすこしばかり関わっているのである。/11月例会の第一部は美術家・原田哲郎氏の『グリーンバグ批評選集』(藤枝晃雄編訳 勁草書房)より「モダニズムの絵画」を取り上げます(大橋愛由等)

にしもとめぐみ 訳

Automne Malade

Guillaume Apollinaire

「病める秋よ」 ギヨーム・アポリネール

Automne malade et adoré	病める秋よ 好きだよ
Tu mourras quand l'ouragan	薔薇園に嵐が吹きすさぶ時
soufflera dans les roseraies	
Quand il aura neigé	果樹園に雪が降る時 君は死ぬだろう
Dans les vergers	
Pauvres automne	かわいそうな秋よ
Meurs en blancheur et en richesse	死ぬだろう 雪と熟れた果物の
De neige et de fruits mûrs	清らかさと豊かさの中で
Au fond du ciel	空の奥深くで
Des éperviers planent	ハイタカが舞う
Sur les nixes nicettes aux cheveux verts et	愛することなどしない こびとたちや
naines	
Qui n'ont jamais aimé	緑の髪をした無垢な妖精の上を
Aux lisieres lointaines	遠くの 森のはずれで
Les cerfs ont bramé	鹿たちが 鳴いた
Et que j'aime ô saison que j'aimé tes rumeurs	なんて 好きだろう 季節を 君の物音を
Les fruits tombant sans qu'on les cueille	誰も摘まないのに 落ちる果実の
Le vent et la forêt qui pleurent	風と林の樹々のむせび泣く声を
Toutes leurs larmes en automne feuille à	涙 秋のすべての
feuille	
Les feuilles	落ち葉よ 落ち葉よ 落ち葉たちよ
Qu'on foule	人が踏み歩く
Un train	汽車が 走り去る
Qui roule	
La vie	人生は 流れ去る
S'écoule	

俳句

◆ 鴉啼く 詠

岩脇リーベル豊美

鴉啼き胡桃自ら爆ぜるを待つ
 《南半球の娘に》
 甘噛み癖あるテディベアよ孤月
 秋茄子を煮びたし右足のバランス
 私を止まり木にするなとセラピスト
 雪原を裸足で駆けろとセラピスト
 消去法で宇宙空間へごみ捨てる
 無言で降りつづけて雪よ転生
 冬夜具に528 Hzの入眠儀式
 冬空に逃げぬと岬岬たる稜線

◆ ペガサス

乾佐伎

消えてまた光るピアノの旋律が
 おかえりと言われてみたい風も
 夕映えを見届けるのも年用意
 ペガサスは降りる心の傷あとに
 雪片のひとつはわたしに降り
 カーテンが揺れる明日を疑わず

◆カレー

いなだ豆乃助

巨人たちの巻き添えを喰ったからには仕方ないのでカレーライスでも作ろうと有志で炊き出しの最中に米を忘れたことに気がついただが 米屋のあつた場所は巨人に踏み潰され跡形もなくなつて

世の無情を嘆いても仕方ないのでライス抜きのカレーでもよいかと皆で納得しあつていとひとりの青年が立ち上がつてライス抜きのカレーなぞもつてのほかだと言うのです
皆はそんなこと言つてもねえたまには炭水化物抜くのも健康によいよなどと

青年を説得するのですがライス抜きのカレーなんて福神漬けの乗つていないカレーと同じだと宣うのですそのとき皆は福神漬けもないことに気づきましたが知らないフリをしました
さて この後どうなつたのでしょうか？
無事に皆はカレーを食べられたのでしょうか？
青年は納得したのでしょうか？

◆カンガルー

いなだ豆乃助

発汗の折に意味不明な言葉を発することはまああることだだがそれにしてもカンガルー
これはなんだろう
オーストラリアの大地でのびのび暮らしたいという意味であろうか
白の辛口ワインを抱えて転がつて生きていくのもよいのだろうか
転がつてばかりだとカンガルーにふまれてしまうのではないかとしんぱいになる
しんぱいは止していまは熱に浮かされているじぶんを楽しみたいカンガルー

◆痛み

原田ひでよ

あんまり 痛いとき
ひとは
何も考えられない
テレビを見てるけど
見ていなくて
横になつてるけど
眠つていなくて
立っているけど
中心がなくて
ただ もう
痛いだけだ
この世に
痛い という
そのひとつのことしか
なくなつてしまふ

◆おねだり

原田ひでよ

ドラえもんにおねだりしたいなあ
わーすーれーアーメー
ひとつぶなめるとね
ぜーんぶ 忘れちゃうんだよ
ほめられたこともね
かなしかつたこともね
すぎだったこともね
いたかつたこともね
そしたら わたしは
ぼんやりするかしら
ううん
いちばんいいえがおで
につこり するとおもうんだ
そしたら わたしは
ぼんやりするかしら

『ゴドーを待ちながら』はサミュエル・ベケットの演劇の脚本である。パリで初演されたのは、一九五三年一月五日。この日付けは「演劇史を区切る重要な日付の一つとして記憶されるだろう」と訳者の高橋康也は書く。ベケットは不条理演劇の劇作家でかつ小説家、詩人である。『ゴドーを待ちながら』は現代演劇最大の傑作で不条理演劇の代表的作品と言われる。

「ゴドー」は「ゴッド」のもじりと解することができる。既に一九世紀にニーチェは（キリスト教の）神の死を宣告していた

ベケット『ゴドーを待ちながら』 富岡和秀

が、神が死んだらしいその後の時代を生きる現代人は、それに代わる「神もどき」を待ち望んでいる感があり不条理な時代を生きている。ベケットの劇では待てども来ないゴドーを待ちながら二人の登場人物が不条理な台詞のやりとりや役回りをする。全編、なにやら嘯み合わない、矛盾だらけ、隙間だらけの不条理の芝居が進行する。

高橋康也は解題で次のように語る。デカルトの「私は考える、だから私は存在する」を祖上に載せ、この芝居のなかで物事の脈絡をつけるのが「考える」こととすれば、ベケットはそ

れを嘲笑するかのようだ。例えば芝居中の第一幕の台詞に二人の登場人物の次のようなやりとりがある。

ヴラジーミル 土曜って言った（間）と思う。
エストラゴン 仕事のあとでか。

この台詞中でヴラジーミルがしがみついている「思う」つまりデカルト的「思考」（コギト）に対して、エストラゴンが疑問符を付す「仕事のあとでか」つまり「と思う、か？」に見られるのは「思考」への当てこすりとも考えられ、このようにデカルトの原点が、この芝居では嘲笑される。

ベケットはアイルランド出身。ダブリンのトリニティ・カレッジでフランス文学とイタリア文学を学ぶ。ダブリンではアベイ劇場によく通っていた。その後パリに渡り、二十世紀最大の作家の一人ジェイムス・ジョイスに出会い、秘書をする。その折のジョイスの断片などは『フイネガンズ・ウェイク』にその痕跡を留めている。1969年にノーベル文学賞を受賞。

*『ゴドーを待ちながら』の原著はEdition de Minuit. かさら初演前年の1952年刊行。翻訳は安堂信也・高橋康也の共訳。新編改訳ベスト・オブ・ベケット全3巻のうちの一冊として白水社から1999年刊。その後、白水Uブックス（新書判）で2013年刊。

来年五月に、攝津幸彦について報告することになっている。そろそろ準備しないと間に合わないので、彼の全句集からぼつぼつと気に入った句、気になった句を鑑賞して行くことにする。

一 みごもりの厨に敵の蜜垂らす
「姉にアネモネ」より。句集冒頭の一句。

昭和の昼過ぎに放送されていたTVドラマの要約をみているような句。下五がエロスを伴う。

「敵」を作者にあてはめることは出来そうにない。作者は、あくまで黒子に徹している。

この程度のドラマしか書けないのかという、作者の嘆きが潜んでいるようにも思えるが、読み過ぎか。

二 産み流すかな二の腕もなき水母かな

一から五まで続けた連作の二句目。他の句は、

姉にアネモネ一行一句の毛は成りぬ
あぶら屋の三女の顔を濡らして婚
のど元を過ぎて四谷の椿かな
夢臭き枯野を渡る五人かな

となる。

一は、植物のアネモネに動物の毛と、取り合わせが成功しているが、あねあねの言葉遊びが微妙。三はちよつと苦しい。四は平凡。五は既視感。

二を読んでみると落ち着く。水母のおびたらしい数の産卵と、自らの姿との対比。若干の悲しさとたくましさ。

三 濡れしもの吾妹に肝にきんぼうげ

g i m oから, k i m oそしてk i m pと, i mの音の連なりを愉しむ言葉遊びとそれを引き出す「濡」のイメージ。音を引き金として変転するイメージの連鎖は、動物的なものから花に昇華してゆく。

句集をわずか二三ページ読んだ段階で、早くも、女性を動物的なイメージと植物的なイメージを重ねて変貌させてゆく技法を見て取る事が出来る。

四 白髪に蜜光りけり夢の秋

句集発行が昭和四八年。白髪には老いのイメージがまだ纏わり付いていた時代。そこに蜜が加われば老いのエロス。夢の秋という強引な下五は、力押しにまとめようとする若さを感じる。老成を目指す若さ。

五 みづいろやつひに立たざる夢の肉

「姉はアネモネ」より。音の流れがきれいだというのが第一印象。夢の肉をどう取るかで、高尚にも下世話にもなる。あるいはダブルイメージを狙ったか。「つひに立たざる」が内面にある失望感を見せつつも、「みづ」が全体を淡くまとめる。夢の肉は、ある種の青春の夢か。

六 葱ぬきて青き矛盾を捨つるなり

葱を捨てて、爽快感に浸れたかというのと、そんな気分を表す語法は採用されていない。まだ矛盾に翻弄されそうな雰囲気漂う。葱の根元の白さが目にしみる。

七 千年やそよぐ美貌の夏帽子

美貌の女性の夏帽子が風にあおられて揺れ動く。そんな場面設定に対して、上五が「千年や」。美貌の女性像と平安王朝文学との重ね合わせが試みられる。想像たくましくすれば、受験補習を受けたときの国語教師に対する印象からの発想と思いたくなるが、多分伝記にはそぐわないだろう。

句集「姉にアネモネ」は、一九七三年発行、全五十句。私は大学生だったが、彼は結婚して子どもが生まれようかという頃。エロス、郷愁などなど。一九七〇年代の雰囲気の中で作成されてということが、どうしてもこちらの読みにも影響してしまう。
第二句集以後の展開は、次の機会に。

攝津幸彦句集拾読二〇二二・十一 野口裕

★剥離される明日

大橋愛由等

逃げる？
どこに
なんのため
逃げる？
いつもの
あの寂寥とした
お上が保証する
“安堵”な
漆黒の立方体にか
生者が日々
タナトスに大義に
蝕まばばれ
弄ばれ
食い尽くされる
あの絶望へか

剥離しようとしている
さようなら さようなら
でもぼく・たちは
新しいモノガタリを
探しもとめ
胸ポケットに
縫い付けるだろう
こんにちわこんにちわ
デモ カナシイ

せめて――
あのひとが
ソレアを踊り終わるまで
待つてはくれないか
あのひとの
サパテアードは
無愛想だった
風を歓喜させ
笑わぬ聖母は微笑み
苦水はいつのまに
聖水となり
深く閑かに眠っていた
ガイヤも陽の光を見るだろう
ああ あのひとが

どこへ？
ぼく・たちを
埋めようとしているのか
それは
オレンジと薄荷の樹の
間でもなく
石の影が鳥たちに
囓われ
二つの河が
血と涙であふれ
少女たちが
夢をさんざんに
裁断するとき
立ち現れるあのその
〈更地〉へ なのか
そうだそこは
時の重なりと
悲しみの深みを
記憶することが
許されない
永久の失念の地
語ろうとすれば
失語と吃音が
待ち構えるあのその地

くるくる
回転するたびに
縞蛇と双魚たちが歓喜する
ぼく・たちは
逃げることに
必然なのか
旅人〈Vajero〉は
いつか回遊魚のごとく
戻ってくるはず
ここで生きること
悪であり、許認されないのか
向日葵の花たちが
幻をみすぎて
無言を貫く日
蝶が鳥に追われ
インク壺に
溺れる日
黒い風が
含羞のあまり逐電する
その日
古里の
カンテホンドを

どこへ？
生きとし生ける者たちは
列をなし土地と風を棄て
ここからいまから
なんのため
だれのため
向かえというのか
海は山はそして月さえも
ぼく・たちを向かう先から
拒み閉ざし
風は日々
コトバを
奪っていくだろう
残忍なままに
いつも肌身離さず
胸ポケットに
縫い込んで
信奉していた
有り難い五七調の
モノガタリ
むずむず
ウソがバレ
ぼく・たちから
剥離しようとしている

聴くために
還ってきたそのひと
ぼく・たちは
夜が小川で
水浴びをして
小枝たちが
焦れ死することを見るだろう
フェデリコ
あなたは還ってきた
グラナダに
どうして なぜ
ぼく・たちは
追われ埋められようとしている
旅人〈Vajero〉になるしか
アンダルシアのすべての影が
生者を嫌い
ありとある薔薇が萎れていく
この街この刻
ソレアはまだ終わらない
縞蛇と双魚たちは地の底河の底
フェデリコ
啼くがいい 囁うがいい
すべては生者のために
明日を嫉妬しているのだから

◆はてしなき観察ののち

野口裕

メモリーと呼ばれる電子回路のデータを手に入れたのは、どうした経緯だったのかよく思い出せない。多分、一回きりしか逢っていない人からだったような気がする。それはまあどうでもいい。メモリーにはおびただしい写真が入り、枚数は数えたこともないが10の肩に載せた10の肩に10を載せて、また肩に10を載せて、それを100回ぐらい繰り返し数から1を引いたぐらいの大きいのか小さいのか分からない量が入っている。ここで数を量と言ひ換えたことで、質が量に転換しているなあと余計なことを考えつつ、ぼんやり写真の群れを眺めていると、それは本当に群れの端が霞むほどの遠さでと言いたくなるほど、何の変哲もない空がずらずらと並んでいるばかりのものだった。写真の端に雲が引つかかっていたり、中央だったり、雲がなかったり、逆に雨が降っていきそうな黒雲だったりと姿は変わるけれども空だけには変わりなく、撮るのに一体どれほどの時間がかかるのかは想像もできない。

おそらく、これは定点観測用に据え付けられたカメラから定期的に送られてきたデータをため込んだものなのだろう。たまたまそのカメラが事故か災害かで取り付けられた支柱が倒れて空を見るばかりになってしまった。そんな想像ができる。しかし、おびただしい数はカメラがどれだけ長い時間放置されたままだったのかと考えさせられる。電源はソーラーパネルだったのかも知れないが、よく保ったものだ。

延々と代わり映えない写真を見ることを気まぐれの日課として五

年経った頃、ようやく空以外の物が写っている写真に出会った。見るのには五年だが、変わらぬ被写体をどれほどの期間撮り続けていたのかは、おそらく百倍、千倍ではきかないだろう。気の遠くなる時間の果てに出てきたのはレンズの上方にあると思われる枝先の葉。一枚見つけてからの先は、空と葉の写真がずっと続いていった。もつともそれは不意に中断され、葉がなくなつて枝だけになったり、また葉が現れたり、気まぐれな変化を見せながらまたもや延々と続いていった。

しかし、空ばかりの写真を見続けた頃には気付かなかつたことを、枝と葉は教えてくれた。いや、よく考えれば空ばかりの頃に気付いても良かったのかもしれない。この写真には色が付いていたのだ。葉の緑が出てくるまで、気付かなかつたのはうかつではあるが、気付いたときにはうれしかった。ひよつとするとカメラもうれしかったのではないかと思つたのはちよつと酔いながら写真を見ていたせいだろうか。データの取り込みを監視し続けた、そんなものがいたとしての話だが、AIでも良いのだがと思ひをはせる頃にはひどく酔つ払つていた。

さて、一月ほど枝と葉のついた空の写真は続いたが、不意になつてしまった。なくなつてからも空だけの写真を見続けているが八年経つても変わり映えない空が続くばかりだ。おそらく一生かかつても見終わることはないだろうが、葉の付いた写真を再び見る必要があるだろうか。

カメラ近くにあつた木の葉が偶然写り、寿命尽きた木が倒れてから葉が見えなくなつたと思ひえるのだが、延々と続く空の写真の連鎖の中にちよつとしたアクセントが挟まれたことが、何かうれしいことのように、これからそんな変化が現れなくても、ま、いいかと思ひえるのだつた。

◆影

富岡和秀

山頂に雲が流れ、山全体に雲の影が覆っている。麓には野犬が歩き、犬は雲の大きな影を分有する。野犬の影へと分有されたとたんに犬の魂が影を地面に這わせるのだが、その影は犬の魂の化身であるかのようであり、影の魂は犬に乗り移つたと見るや、たちまち走りだす。犬を引き連れた影が疾駆する。

そのとき、風が竜巻のように乱れて吹き、山上の雲は飛び去っていく。風を避け山麓の反対側まで回り込んだ犬の影は雲の影から分立して、地面を這いながら、なおも疾駆していくが、その方角には点描のように雑木林が連なるのが遠望でき、その方へその方へと影の魂が走り続ける。何があるというのか、影の魂は探求を決意しているように速度を速める。

点描の方へと、疾駆する犬は今や影だけとなり、野犬の物質性を放棄して残余の動物の超能力で感知して走って行く。林が間近に迫ると、古い木造の家が林の立ち並ぶ入り口に佇んで、家もまた影を揺曳させるが、影の魂は息せきぎつたかのように木造屋敷に忍び込んで行くのだ。

屋敷の暖炉には焚き火が見え、壁面には焚き火の影が揺曳している。家屋敷に忍び込んだ影の魂。犬の物質性を無くした影。自らの魂そのものである影。その影が焚き火と壁面に揺れる影の像に自らを投入して、ゆらゆら揺れ動く焚き火に同化され懐かしいノスタルジーを感じている。郷愁を感じるのには真なる魂がそこにあると、動物性の痕跡を記憶に留めた本能で直観するからだ。

暖炉の炎は壁面の影として部屋一面にひときわ大きくなつて揺曳するが、影だけが焚き火の影として揺れているのである。投入された影の魂はもはやクウクウという音と声を発して、壁面に揺曳する焚き火の影に音と声として包まれているだけのようだ。

暖炉の焚き火はやがて下火になると影は小さくなつて煙突から屋根の上へと上昇して行く。屋根に山上から流れてきた大きな雲の影が覆うとき、暖炉の焚き火は消滅している。

影の魂を吸い込んだ焚き火の影。その影の生み出された暖炉の焚き火はもはや消え、不思議にも非物質化した犬の魂の影をも包み込んだ影となり、屋根の上で新たに雲の影に包まれる。影の同一化が顕現する。

その影は山麓で分有されたが、元の大きな雲の影に内包されひとつになつていないか。影は循環するのが、真理であるというかのように。非物質化した犬の影の魂は焚き火の影に吸い込まれ再び雲の影に包まれたかのようにだ。焚き火の影に媒介され雲の影に包まれる犬の魂は雲の魂でもあるのか。影が循環する。

影となる犬と影となる雲を媒介した焚き火の「火」。自然本能で動いている犬の、その影を炎の影のなかへ吸い込んで消えながら、炎みずから影となる。影と影を包括しながら自らも雲に吸い込まれるのだ。原始から変わらない焚き火の魂。ゆらゆら揺れる原始の焚き火の影。柔軟な炎と影。

その焚き火の背後に透明な人が佇んでいるのは、雲の影に分有されるのが実は焚き火を起こした人の魂の影だからだと誰が知つていようか。炎と影の真実を待ち望む人の無意識の場所は原始の焚き火とその揺れる影のなかに潜んでいる。

◆芋を食べている

中嶋康雄

今日も芋を食べている
昨日もごはんは芋だった
明日もたぶん芋だろう
お金をくれない兄さんがしょんぼりしている
兄さんの立つ場所だけ雨が降っている
傘も腐って垂れ下がりがり
うすよこれガードレールのうめき声
夜に小銭をじゃらじゃら鳴らすと
蛾や妹が寄ってくる
妹が落ちた虫と交尾している
じゃんけんぼん
妹は芋の
星がまたひとつ消える
みんなの夜空はなにもかわらない
磁石の不満はやりすごそう
月が赤い
今日も芋を食べている
教科書が電子にかわる

電車が幽霊の巣になる
もう誰もどこにも行きたがらない
今日も芋を食べている
水も飲まずに食べている
恥が物色されている
雨漏りの上を他人が滑る
明日はもうわずかしかないだろう
肉はコオロギ
飯は芋
墓に行く
退屈だ
靈魂がいちおう漂っている
誰のやつだかわからない
呼びにきたのか
こんなにゆがんだ切り口が
ネバネバ目つきだ睨んでいる
遊びに行く前に
みんなが芋を食べている
無言で芋を食べている
耳の中は膿であふれている
金属音が続いている
兄さんが妹を殴っている
兄さんが妹を蹴っている
兄さんが妹の骨を折っている
足を引っこ抜いて食べている

「だらしないやつだ」
叫んでいる兄さんのパンツが破れて
性器がのぞいている
性器から液体が垂れている
兄さんが芋を食べる時間は正午丁度
「一秒でも遅れると芋が消えるんだ」
兄さんが絶叫している
その口
その喉
芋が詰まる
兄さんは息ができない
顔が真っ赤になっっている
妹が兄さんの代わりに空気を吸っている
妹が兄さんの中の芋を捨てている
喉をくり抜きほじって捨てている
声帯も芋と一緒に捨てられた兄さんは
息だけをふきかえし
新しい芋をやっぱり手に持って
にこにこしている
頭はもう死んでいる
脳みそが新幹線みたいに委縮している
新しい隙間に養殖の
コオロギが棲みついていて
涼しい声で鳴いている
妹が合唱している

◆気化せぬ触手

大橋愛由等

卵を割る
双柱の思念が
都市角の
それとこれの
薔薇園を横超しながら
超現実の
負荷を内包しつつ
ひとびとの笑顔と赤面を奪い
跋扈する
覆いのコトノハと
有無を言わせぬ
覆いのブランコによって
混濁された
文字群が
北北東に嬉々と
触手をのばし

煙製を余儀なくされた
愛と愛たちが
行き場をなくし
帰るべき部屋の鍵を
もたないそのものたちは
堅い鉄扉のまえで
不規則なかつ空虚な
旋回をつづけ
半泣きの夕まぐれに
バ行の吃音が止まらず
かなしみが固化していく
のに耐えられず
卵を割る
そのとき
神話が日々相殺されている
森を駆け抜けてきた
羊たちの
氣息が
いつせいに気化して
語りはじめるありようは
あらたな民譚と
アンフォルメルな意思を

生み出すかのようできて
そのざわめきの群れを
聞き出した風と石たちが
それぞれのコトノハで
記憶しはじめていることを
うつつらと気づいている
哲学者と詩人たちが
ためらいの
薄ら笑いをうかべながら
「それとそれ」
「これとこれ」
と果てない談義を
なしている初冬の
その日もまた
夢の解体がとまらない
不在のままの
薔薇園のなかで
創出しながら亡滅する
コトノハたちが
所在なく
月陰にひそみながら
佇ちつくしていよう

◆ 『マルクスの場合』

「旅立ち」②マルクスの日常

諸井学

遠くから雨戸を叩くような音が聞こえてくる。「何だろう？」と不思議に思ったところで目が覚めた。マルクスが階段のところまで吠えていた。

マルクスは私の傍らにきて地団太を踏むようにして吠え、また階段のところへ走って行って下に向かって吠えている。母を呼んでいるのだ。オシッコがしたいのだけれど、階段を降りることができない。「分かった、分かった」、私はそう言いながらマルクスを抱えて階段を降りた。洋間からテラスへ出て、庭に向かって放してやると、勢いよく駆けて行った。

しばらくしてマルクスは鉢植えの陰から出てきた。そして、ゴルフボールを銜えて帰ってきた。これからゴルフボールで遊ぼうという催促なのだ。

マルクスは銜えていたボールを私の前に置いた。私はボールを取りあげて、芝生の方へひよいと投げる。マルクスは喜んで駆けて行き、ボールを銜えて戻ってくる。また投げる。また銜えてくる。他愛ない動作の繰り返し。マルクスにはすこぶる面白いらしい。マルクスは喜んで庭を駆けまわった。

ところが三度も続けると私の方が面白くない。そこでちよいと

を起こして、ゴルフボールをあらぬ方向へ投げてやった。花壇の中、生垣の下と出鱈目に投げてやる。マルクスは喜んで取りに走ったが、そのうち道草をするようになり、ついにはズルをして違うボールを銜えてきた。

「マル！ 違うじゃないか。投げたのはマックスフライの2番だったぞ。これはアルタスの5番じゃないか。あつちのボール！」

そう言つての方を指さし、ボールを元あつたあたりへ投げ返した。マルクスは生垣の方へは行かず、再びアルタスを銜えて戻ってきた。

「違う！ あつち！」

私はアルタスを、マックスフライを投げた方へ投げた。マルクスはそちらへ行かず、植木の陰からタイトリストの1番を銜えてきた。腹が立ったので投げ捨てた。次はキャスコを銜えてきた。取り上げるとスボルディングを銜えてきた。そして、マルクスの方が面白がつて、庭中のゴルフボールを次から次へと私の前へ並べていった。

私はマルクス・アウレリウスによって深く自省した。いかなる行動にさいしても、でたらめになすことなく、それにかんする技術の基本的な基準にする仕方は避けてなすべきである。(四・二)

そのあと、私たちはスリッパの引っぱりあいをして遊んだ。

(つづく)

海猫堂店仕舞記②

千田草介

「ピンクちゃん」住職が言った。「月輪観を観想しなさい」

「ガチリンカン？」

「このまえ教えてやったやろう。まあいい月を心に浮かべるんや」

「住職」ミロクさんがいぶかしげに、「この人麿山月照寺は曹洞宗でつしやろ。なんでまた真言密教の観想法を？」

「宗派を超えるチベットのリメ運動に賛同したわけではない。ミロクさん、あんたみたいな変な人にここで「星を売る店」を店開きさせたのも、ただの縁日のテキヤのたぐいやなかったんですわ」

「ピンク」にくらいついていた猫(かろん)が銀色の円盤にすがたを変えた。そのまま皿回しのようにくるくる自転しつつ月の光をぴかぴか乱反射した。

どやどやという足音が寺の下から近づいてきた。天文学館を守護する(軌道星隊シゴセンジャー)の面々である。(ピンク)の悲鳴を聴きつけたのであろう。

「おっ、さつきは見なかった怪しいやつ」戦隊をひきいる(フ

ラック星博士)がハーヴァード氏を見て身構えた。「さては、その気配では、星を盗みに来たな」

「ご明察」ハーヴァード氏が後ずさった。

「かたがた」住職がとりなすように言った。「ここでもめごとをしては、話がまとまらなくなる」

「さよう」ミロクさんが言った。「わしの店の商品が乏しくなつたんで、ここへ星を仕入れに来ることになったんやが、考えてみたら、もうべつに店をつづける必然性はない。始まるのあるものにはかならず終わりがあつた。仕入れをやめて店仕舞いにしてかまわんのや」

「うるさい人たちだな」突然あらわれた人影が言った。「いったいぜんたい何ごとやね」

「あんたは？」ミロクさんとハーヴァード氏が異口同音にたずねた。住職にしても初顔の人物らしく、そのすがたを見て首をかしげている。

「さつき、だれぞや、わしの作った歌を口にしていたな」人影が言った。「ひんがしの、のにかぎろひの、たつみえて、かえりみすれば、つきかたぶきぬ」

「え、では……」一同、人影を注視した。

「わしは柿本人麻呂」

(つづく)

風景の隙間(3)

リチャード・パーカー

二三日すると、ライティング・ビュローが闇の壁に張り付いていることがわかった。闇の壁というのは光を当てても闇のままでありつづける闇の表面で、眠っている間に何匹かの猫が人の白い骨を舐めている。さらさらと気持ちよさそうに猫は骨の味を楽しむのだ。その闇の中では竹の根が銀色に輝く根毛をゆらゆらとさせて死体に絡みつき、生きてるように死に、死んでるように生きている我々を静かに眠らせるのだが、猫の舌は眠る人のすべての骨を味わうために胸の上に乗りに、頭蓋骨やら鎖骨から舐めはじめて肋骨の裏やら背骨までなめつくして、野生時代の晩餐会を思い出し出しているのだ。

どうやら、彼女は自分が猫から人間に変身していることに気が付かないみたいだった。おそらく彼女はライティング・ビュローの暗箱の中を通り抜ける時には猫になっていくが、闇から出て人間にもどる薄闇の中では灰色の人猫の姿をしているはずだ。というのも暗箱のふたを開けてみないと中に猫がいるのか人間がいるのかわからない。いや、それどころか誰がいるのかもわからないのが暗箱のなかだ。それに、よくあることだが、闇の中では知らない誰かを連れてくることもある。誰かにつけられていたとしても気がつかない。闇の中では誰かが背中につき付いているかと思っただけがよい。智子が連れてくるのは猫とはかぎらない。闇の中では、まったく知らない人が背後霊のように張り付いてくることもよくあるのだ。黒猫になってフーコについできたものがある。

まず無邪気なフーコが出てきたが、照明を浴びるとばたりと床に倒れて撫でてくれといったげに高橋の顔をうかがう。彼はすかさずしゃがみ込んで背中を撫でるが、仰向きになって腹を撫でてくれと急になれなれしい態度になる。背中から手の平が胸にやってくるのと手の甲を舐める。ゴロゴロと喉を鳴らしはじめて脱力すると、もう恋人きどりで、めちゃくちゃに撫でてよと啼く。猫の性感帯には触れないようにと思うが、背中も頭も感じやすいので全部がそのようでもある。ペットのペティンが付き合うと性的な悟りの世界に入つてゆく。膝に飛び乗ってきて高橋を倒す上に乗って両手で胸やら腹やらを揉みはじめて恍惚の表情になっていく。爪がチクチクと当たつてそうでもないが、満足げな表情をして見せると、猫は急になれなれしくなつた。

すると、今まで気付かなかつた北側の黄色い壁が妙に明るく見えてきた。それは壁紙のせいでもなかつた。窓の外何かに海の光が照り返して、部屋の奥まで差し込んでいくからに違いない。そう思つた彼は南側の窓の下に一体何が見えるのかを確かめたか。木製の窓枠は白いペンキで塗り固められていた。乾いた黴の匂いがした。開くかどうか、手を伸ばしてみたが、窓枠全体がペンキと一緒に腐りかけていた。頑固そうに見えた外壁も頼りない板の上に薄いモルタルを塗り込んだもので、今にも落ちて壊れそうなほど古かつた。窓が実際に開くのかどうか確かめなまま、彼はその前に大きな机を置いてしまつていた。前の入居人がどういふ訳か両袖の机を残していったのだ。悦んだ彼はその上にコンピューターのクマを置いてしまつたものだから、その窓は開くと同時に下に墜ちるに違ひなかつた。

「あら、この窓、開かないの。地震で何もかも狂つてしまつたのね」

彼は再び部屋の北側の黄土色の壁を見た。小さな模様様が光を吸っているように見えた。壁の中から何かが発光しているようにも見えた。そこには飲み込まれそうな不安感が漂つていた。海の光を受けて幽かにクマの影法師のようなものも壁に写つていた。それにもかかわらず、壁の中からは仄かな光が漏れているように見えた。

彼女は彼の荷物を整理しようとした。不意を付かれた彼は、遠慮することも、感謝することも忘れて無然としていた。一体どういふつもりで、こんなに親切なだろう。そう思つているうちに全身から、とめどなく汗が吹き始めていた。スポーツのせいかも知れないが、彼の汗腺は時々開きっぱなしになることがあつた。

「すごい汗ね」そう言われた途端に、鼻先から熱いものがぼたぼたと滴つた。きつと凄い体臭がしていたのかも知れない。だが、彼は自分の汗の匂いが好きなのだ。それは川の匂いと西瓜の匂いの混じつた甘い匂いだった。

「悪いけど、もう、これくらいにして欲しいんだ。彼の住み処なんだから、誰にも触られたくないんだ」そうは言つてみたものの、彼は何もかも許し始めていた。つまり、彼女を捕らえるためには何もかも許そうとしていた。

「でも、どうして、南の窓は開かないのかしら、何もかも地震のせいよね。この部屋、中庭からしか風が入らなくなつたわ」

り、人のことを親だと思つてしまつてみたいだ。

すると、また、コンコンとノックする音が聞こえてきてライティング・ビュローの暗箱の中から何者かがやつてきたみたいだ。猫は吠えもせず、シヤーとも叫ばずにしている時には本当に寂しい気持ちになるものだ。闇の中から四角い顔を現わしたのは、見覚えのある刑事だった。やつてきた刑事はいきなり警告を発した。箱の中に閉じこもつたまま仕事をするので刑事が四角になるのはまだ労災認定されていない職業病だ。彼が追いつけているのは高橋だった。

「気を付けてください。この家では何人かの下宿人さんが行方不明になっています」

「それなら、気がついたことがあります」

「なんですか」

「この部屋に移つてきてから、悪夢を見るようになりまし。サイクリングに出たり、ドライブしたりしていると道に迷つて帰れなくなる夢です。なぜ迷うのか解りませんか。実は徘徊の原因というのは帰り道を忘れたというよりは行き先を忘れていくからなんです」

「行き先を忘れるということがあるのですか」

「帰れなくなるのは行き先を忘れるからです」

「なるほど、わたしには行き先を知られたくないので、そんな風になるのですね。その症状は自殺の原因になるかもしれない。帰るところがなくなる以前に行き先がなくなっているからでしょうね」と白いコートの刑事はゆつくりと口だけで笑つた。

確かに闇の回廊がある。いちど闇の回廊がつかないと、それはもう消えない。刑事や泥棒がいちど家に入つてくると、引き続き何度もやつてくる。道とはそういうものだ。

光が一度入つてくると何度か何度かやつてくる。

この町では光がどこまでも染み込んでいくように見えた。大地までも光を含んで赤く見えた。夕方になると山脈が影を落とす。すると物陰には闇の換わりに藤色の気体が立ち込めているように見えた。そんな空気が彼を投げやりな気分にならせていった。

部屋の中をいくらか整理しても、どうしても良い家財道具はちぐはぐな感じがした。ステレオのアンブだとか片方しかないスピーカーだとかいつたガラクタが捨てられずに何処までも彼の跡に付いてきていた。見ていただけで疲れる相手だった。彼は諦めずに何度か壁に凭れて衣類の入つた木の箱の配置を

彼はその中庭の窓を一杯に開こうとした。無花果の匂いが彼の体臭を掻き消していた。そして、それと入れ替わるように彼女の匂いが膨らんでいった。彼は彼女の厚かましさに満足していた。我が俣を許す限り、彼女は帰らないのだと確信した。

彼女は自分の居場所というものをたえず確かめていた。彼女に影ができないのはそのためだろうか？あるいは影がないから、自分の居場所というものがない。彼は力を持ち振って彼女との共同作業に熱中した。二人ともすごい汗かきだった。スポーツのせいで汗腺が開きっぱなしになるのだと思つた。ジーンズが肌を張り付いていた。次の瞬間、身体の中から湯泉のように汗は吹き出し始めていた。それはダンスの汗やテニスのペアプレイの汗に似ていた。大汗をかいて一段落すると、なんだか相手の中身を知つてしまったような気分になつた。知らず知らずにお互いの汗に触れ合つて交わつていた。一つの行為によつて、二人の身体は同じように火照つていたのだ。もう触つても彼女は何の拒絶もしなかつた。あるいは、最初からかの序は何の拒絶もしなかつたのかも知れない。何度か風呂場で雑巾を洗っているうちに水道の蛇口から身体に水が飛び散つた。

「ちよつと、ちゃんと足を拭いてよ」

「そんなの拭かなくつても、風で乾くよ」

彼は何もかも放り出すと風呂を沸かした。これは何とも滑稽な行為だった。二人は笑いを堪えながら、時々思い出したように相手と顔を見あわせた。風が吹いて、風呂場には大きな葉っぱが二三枚落ちていた。枯葉の季節ではなかつた。緑色のまま衰えた老人の手のように見えたのは無花果の葉っぱだった。浴槽は、素人臭い仕上げのタイル張りだった。ところどころに白セメントがはみ出していた。彼はそこそこつた仕上がり気が入つていた。

「なんだか痛そうなお風呂ね」と、彼女は怪訝そうな面持でそれを眺めていた。旧式な種火の検査は一人では無理だった。彼女が浴室の点火スイッチをひねり、彼は壁の裏のキッチン側の側から火の具合を見つめた。浴室の窓から外を見ると、再び無花果の樹脂の強烈な匂いに襲われた。窓の外は中庭風になつていて、壁一面、緑に被われていたのだ。植物は何もかもが大きく育ちすぎていた。あちこちから噓返るような香りが立ち込めて、植物は官能的に絡まり合つていた。彼は眩暈を感じた。蜜の匂いと樹脂の匂い以外に様々な植物の強烈な体臭とも言えるエーテルのようなものが空気全体を塗り替えていたのだ。

これらの植物はひび割れの深い闇の中から芽をふいていた。彼はその少し

透明な葉の一二枚を目に近づけてみた。どれもこれも新種の植物に見えた。茎をたどり、根をたどって闇の中を覗き込んだが、そこには土らしきものはなかった。虚ろな闇が底無しに続いているようにしか見えなかった。

彼女たちが何より求めているのは居心地の良さだった。彼女は黙って薄いグリーのセーターを脱ぎ始めていた。彼女は誰かに似ていると思った。タオルを使わずに自然の風で身体を乾かす辺りは彼自身に似ていた。彼女の鼻は彼と同じように少し大きすぎたし、口も少し出ていた。二人は大きな目を見合わせて何度も自分の顔を思い出した。そうでもなかったら、その時の彼には他人の中に入って行くことなんか出来なかった。彼には恋愛感情というものが分からない。何よりも自分だけを愛しているには自信があった。彼女は自分自身の延長であった。彼女との感情は奇妙な共生感覚のようなものだった。彼たちは兄妹のように気軽に触れ合っていた。彼はすぐに彼女の口臭が好きになっていた。懐かしい思いがしたのかもしれない。それに汗に混じった風変わりな体臭もだ。ネパールのバター茶の香りと言うのは、多分、こういう香りのことだと思ふ。誰だつて自分の体臭が一番好きなのだ。

彼はまるで自分のジーンズのように彼女のジーンズに手を掛けていた。ジッパーは簡単に開いてしまつたが上のボタンが少しきつかつた。

「馬鹿ねえ、ふたりでやるからきついんじゃないの」と彼女は前を開いた。

二人はお互いに知らず知らずを装いながら肩を寄せ合っていた。彼女のジーンズの中で指が触れ合い、爪がからんだ。ジーンズの縫目は随分固く感じられた。彼女の指の骨格は猫のように柔らかくなっていた。何かを辿りながら彼の指はもつと柔らかくなっていた。そこから、だらんと伸ばした手足から力が抜けて、中身の白いライナーのように何かが剥き出しになりかけていた。

彼は指先で潰れそうな果実を思い出していた。

「ネエ、それより背中外してよ。ダメよ、シャワーに入ってからよ」

彼たちは脱ぎながら下着を踏みつけた。水しか出ないシャワーの口は詰まり掛けていて、水は壊れた雨傘の骨の形で飛んだ。二人は夕立の中を駆け抜ける子供みたいにはしゃいだ気分になった。雨の中に雨宿りする彼たちの全身はシャワーの傘の中で笑い続けていた。ラベンダーの香る石鹸を塗ると彼女の体はどんどんと重くなっていくように思えた。

「ねえ、もう冗談じゃないのよね、彼女が彼の全身を見た」

「ああ」と身体を押し付けながら彼は言った。何もかもが遠い記憶の中から蘇る夢だった。

総ての現実には既に深い深い夢の中で見る夢に過ぎなかつた。現実よりも色の濃いこの夢は彼が見る夢ではなく、彼を見ている夢のように思えた。

皮下脂肪に浮き上がった血管の中に顔を埋めて彼は目を閉じた。日焼けを

逃れた下腹部の重い塊となった骨格や内臓が彼に迫っていた。彼女には遊びごとでは済まないという重みがあった。女性の体重を感じて人間の存在にはつとした。彼は彼女の膺の中の白い泡を舐めた。彼女は下腹部でウフフと笑った。遠い所からその息が落ちてくるのが解つた。彼の頭を抱き締めた彼女は「ねえ」と言った。乳房が彼の頬に当たつた。彼女はもう一度「ねえ」と言った。彼女の体重に彼はよろめいていた。彼女の臀部の頬肉を鷲掴みにしながら、彼はめりこみそうな体勢を持ちこたえた。中庭から風が吹き、あの、なんとも陰気で甘つたるい無花果の樹液の匂いがまた漂ってきた。二人の胸の間に水が溢れていた。腕の中でこわばっていた彼女の掌が泡のように融け始めていた。泡は拡がりながら彼の背中から脇腹に流れていった。風呂場の窓はまるで青空をぶち抜くほど明るかつた。水の中で彼女の肉体は透明に浮き上がって見えた。細部まで光が射して発色しているように見えた。それから、それを抱き上げて接吻するあいだ彼女の濡れた目蓋はうつすらと開いていた。何もかも見えずぎたのかもしれない。振り向くと、窓の外の無花果の幹は奇妙な形をしていた。湿つた樹液の匂いが汗の匂いと入れ替わっていた。長年、風で擦れ合っているうちに、二本の幹は癒着してしまつたのだらうか？それにしても、記憶の中のある無花果の木は何処から生えていたのだらう。今、いくら思いだそうとしても、まるで記憶の中に穴があいたみたいに思い出せない。

「何もかも地震のせいよ」また彼女は思い出したように言った。

葉っぱの間から白い光が狂つたように点滅しているのが見えた。木漏れ日の下の大きなタオルの中に彼女は居た。海面のように揺れる腹部に手を置いて、彼は猫の毛並みのようにそこを撫でていた。波の音が何度も打ち寄せていた。砂を洗う音だつた。二人の身体は海水のようなものにびっしり濡れてしまつた。それは何度も何度も打ち寄せて、なかなか終わらない波のような不思議な射撃だつた。

何処からともなくホルンの音が聞こえてきた。空が黄色く膨らむような音だつた。だが何のメロディーなのかよくわからなかつた。その柔らかでふつくらした音は何もかもを少しづつ持ち上げていた。彼の胸の中で丸くなった彼女は「いきなりこんなことになってしまつて」と、掠れる声で言う、クマの方を見た。クマは黙って俯いていた。背後の青空は、時間の風のようなものを流し続けていた。彼女の長い息は、砂丘のような腹部と胸の膨らみの彼方から流れてきた。その風が身体をなかに通りすぎるのを彼は味わおうとしていた。天井が海からの光でほの白く揺れていた。光は海岸線のずつと西から、松林の向こうの砂丘と怒涛が白く混じりあう辺りから、大きな息のような風とともにやってきた。

◆ 定型ソネット

大西隆志

銜いとは読めない言葉のひとつになりつつある

天頂も耳で聞いただけではわからないだろう

手につかないのは技術だけではないようだ

定番とはなかなか困難なものを背負っている

意識を持つてる植物とはファンタジーの世界だけではない

意思疎通を図つては危険察知の物質を放出するという

印象では草や花、樹々は動かないで立ち尽くしているのだが

移動を試みる植物の知恵は生命さえも遠くまで動かせる

毛の薄くなつた頭のとっぺんで花見をするのは理に適っており

消しゴムのカスがたまつた毛穴にはあらゆる経験を笑つて

けつたいな言葉もこの世界では貴重な虹の要素でもあるのだ

違和感も言葉であらわすには難しい、が五感の外になくてもいい

イガグリやイバラの小さなささやきや意味も形で放出されて

異化を切り捨てたりはしない、五音結構、七音さらに結構

レガートな日々⑥ 原田ひでよ

ピアノという楽器

ピアノは持ち運べない。だから、ピアノ弾きは、橋の上でトロールに出くわしても「僕の次に笛のじょうずながららどんが来ますから」と言っただけで逃れるしかない。笛吹きの際には、楽器すら必要のない最強の、歌うたいのがらがらどんがやって来て、きつとトロールをうっとりさせるんだらう。

楽屋や舞台袖でも、他の楽器の連中はギリギリまで危ないところをさらったり、自分の楽器の調整に余念がない。そんな相棒を手に握りしめ、舞台に出てゆくのはどれほど心強いことだろう。ピアノはというと、楽譜を開いて最後の確認をし、後はストレッチでもするしかない。それでも、合わせものは、楽譜を小脇に抱え、共演者も一緒に出てゆける。

これがソロときた日には、苦楽を共にした楽譜さえパイプ椅子かなんかの上で「じゃ、がんばって」とばかりに知らん顔。ひとり歩いてゆくピアノまでの遠いこと。そこからは、初めましての見も知らぬピアノと一夜をとにするのだ。(モーニングやマチネーのこともあるけど)

学生時代の恩師、故岩淵洋子先生(以下、洋子先生)は、「最初の音を出した瞬間、少なくとも数秒のうち

れをうまくコントロールして自分の思う演奏を作って行くように」とおっしゃった。

最初の数秒です。できっこない。そうでなくても、緊張してこれから弾く曲のことで頭はいっぱいなのに。百歩譲って把握できたとして、それを自分流に乗りこなすことがどれほど難しいか。先だつてのシヨパンコンクールで、あるピアノリストがそのことについての後悔を吐露していたことは記憶に新しい。

意外に軽視されることが多いのだが、ピアノは置く場所や、その向きによつて音が変わる。響き方と違ったほうがいいかもしれない。ホールの音響事情や、会場の道具などの置かれ方ひとつで、いとも簡単に音が伸びなくなったり、逆によく通ったりする。

時間がある限り、いろいろ試してみたほうがいいし、楽器の傍にいる弾き手には判断できないので、誰か耳のいい人に、客席中移動して聴いてもらうのがよい。蓋の開け方然り。全開と半開以外に、マツチ箱の三つの辺くらいの数センチ、何かを噛ませてほんの少し蓋を開けておく方法は、他の楽器の鳴り具合によつて微妙な調整が求められるとき便利だ。これを、洋子先生は、文字通り「マツチ箱」と呼んでいらしたが、この間共演したバイオリンのYちゃんには、「かまぼこ」と呼んでいた。

逆に、合わせものの途中でピアノソロがある時、半開や閉じたままで弾いているのを見かけると、残念でならない。合わせものの途中でいきなり一人で弾くのは、すごく大変なのだ。ソロも引き受けて頑

張っているのにもつたない、と肩入れしてしま

う。アップライトピアノでも、上の蓋を開けたり、背中を壁にくっつけないで空間を作ればグンと音は変わる。しかし、そんなことでは通用しない事態も、もちろんある。

四年前のクリスマスマスに出会ったピアノは、押さえたらそのまま上がってこない鍵盤がふたつもあった。つまり、その音は初回限定で二度目からは存在しない。仕方ないので、弾きながら、手で鍵盤を持ち上げて元に戻したりしたが、テンポの速い曲ではそれもできず、みょうちぎりんな音楽になるのも致し方なかった。コンサートが終わると、一人の老婦人が近寄っていらして、「私は、おととい退院したばかりなんです。今日は、あなたの素敵なスカートを拝見してよかったです。」とにっこりされた。若い頃、「ドレスしか褒められなかった」とぼやいたら、先輩に「何も褒められないよりいいじゃない」と言われたことを思い出した。本当にそうだ。

その日、私は、寄附という形でギヤラを返上した。もちろん、ピアノ修理の足しにしてもらうためだ。そこを何度も何度もお願いしたつもりだけど、あのピアノはどうなったんだらうか。ギヤラのゆくえとともに気になる。

お客様やスタッフだけでなく、ピアノの場合は楽器もまた、生のコンサートにおいては一期一会だ。そんな出会いに、ハラハラワクワクしつつ、ピアノは今日も、身ひとつで、弾かせてもらえる場所へとでかけてゆく。

◆評価図式

原田哲郎

欧米から流入する思潮に触発され

そのやり方を取り入れながら

主観性に傾き

自己表現を基礎に据え

表現の根拠を求め

思想が抒情に溶かされていく

主観性の優位

かりそめの形態

美術自体の問題に

応えていく方法的組み立てを

持たず絵画の冒険は

描くことの喜びや楽しみの

充滿した中に解消されていく

絵画の立ち向かうべき課題が

そこに現れるだろうか

芸術的行為はおのれの

趣味嗜好を開陳する

アマチュアリズムの場

ではない

はずだよ

神戸詞あしび

165-2022.11.27 大橋愛由等



近松門左衛門作「心中宵庚申」

夫婦で心中する近松劇― 太夫の熱唱が絶品だった

先月鑑賞したロルカの三天悲劇のひとつ「血の婚礼」。クライマックスの場面では、花嫁と「元カレ」である男・フェルナンドが婚礼の場所から逐電する。その二人を追う花婿が、神話的な森のなかでフェルナンドと決闘してふたりとも命を落とすという結末となる。これを花嫁と男の「道行」と捉えることができよう。しかし文楽・歌舞伎の「道行」（男女とも死んでしまう）と異なるのは、決闘した二人の男が死んでしまったあと、花嫁が花婿の母に謝罪のための会いに行くという場面が挿入されることだ。この挿入場面で、この作品の悲劇性が増量するのである。

夫・半兵衛「お千代か」／妻・千代「オイノ」／半兵衛「サア、鰐の口を逃れた、おぢや」と手を引けば／千代「マア〜待つてくださいませ。なまなか一度戻つてこなさんの口から退くぞ去る（離れる）ぞ」と言はれては、未来までの気懸り。この門口でたつた一言、去らぬと言うてくださったんせ」／半兵衛「ハテ愚痴なことばかり。今宵は五日宵庚申、女夫連れでこの家を去る、と思へばよいわいの」／千代「オ、ほんにさうじや」／手に手を取つてこの世を去る、輪廻を去る、迷いを去る／今日は最期の羊の歩み、足にまかせて（近松門左衛門作「心中宵庚申」より）

引用したのは、今月（11・14）大阪の国立文楽劇場で鑑賞し

た「心中宵庚申」の中の一節である。「道行」を執行する場面がかわされた緊迫感あふれる会話である。この作品は、夫婦で心中を遂げるという珍しい設定であり、近松門左衛門の晩年（70歳）の作品となる（2年後の1724年に亡くなっている）。

世話物劇で名を馳せた近松だったが、「心中宵庚申」は、心中ものの最期の作品である。当時、文楽・歌舞伎で心中ものが舞台上げると、あやかり心中が多発したことで、幕府は、心中という言葉が禁止。「相対死」という言葉に言い換えよ、と通達をするほどひとびとの生き方に影響を与えていたのである。そんな時代に作られた作品であった。

わたしは文楽を鑑賞する時、人形の所作よりも、太夫（語り手）と三味線の掛け合いである「義太夫節」を鑑賞するのが好み、その演奏する場所に近い席を取ることにしている。今回は「上田村の段」の太夫を担当していた竹本千歳太夫が、感情をこめ、時にうなるように、背をそりかえさせるほどの熱演であり、絶品だった。

「心中宵庚申」のあらすじを追ってみよう。元武士だった半兵衛は、子どもがいなかった大坂の青物屋（八百屋）に婿養子に入り、店を繁栄させる。そこにお千代という女性が嫁いでくるが、姑はこのお千代と反りが合わず徹底していびり倒す。江戸時代後期になると、姑が養子・半兵衛に恋慕したという改作が演じられるようになり、しばらくの間「心中宵庚申」そのものが上演されることはなかった。昭和40年になって「上田村の段」「八百屋の段」が近松の原作に沿って復元され、（姑の婿養子に対する執着から一転して「姑と嫁のあらい」の筋内容で鑑賞されることになった。姑のいびりと耐える嫁の場面となると、わたしが座る席の周囲を占める中高年の女性たちから、言葉にらなない共感のうめきのような声が発せられていたことを聞き逃さなかった。そして二人が心中をとげる際、妻・お千代の身体には半兵衛との子を宿しており、その子も道連れとするのである。劇が終わったあとわたしの後ろの席の女性がしぼりだすように「胎児を道連れにして心中するのは）やめてほしいわ」と語っていたのも、わたし観劇の一部として強い印象を残したのである。

一誌名変更のお知らせ

ながらく誌名を「月刊 Mélange」としてきましたが、170号から「月刊 MAROAD」に変更しました。これは、「月刊 Mélange」発行当時（2005年）から17年が経過して、参加構成メンバーが入れ替わり、現在の誌友・詩友たちとの連帯を確認し、今後の表現活動の切磋琢磨を願うために変更したものです。（大橋愛由等）

2022年11月27日 通巻178号
発行所／月刊「まろうど」編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通1-7-1 2F
編集・発行人／大橋愛由等
maroad66454@gmail.com
定価 660円(税込)